世来の風

三お流くし　第二

調楚君ゟききつ

江本書

延宝八年九月廿日石山詣るの記

伊予のすけといひしハ、桐つぼの院のくれさきみて、又さん
さしひさしきあはれみにてかぐらしかば、かれもいまぐも
めざましかればなりすきのかれ〻猿ねもものうきよこさく
て、人しれずもやすまろしぬるしもあらざらし
きぐ、うく人ゆべきにみすがぶまあるくて、づくねの
山ぎわきこ寸風もうるくろ心ちしそ、いさくれ
つくへぶまあるくて鳥月つきありなりまた、うぐさ
れつゝともあるらし此猿ねあれど、京のくへま
すみなて、又のとしの秋ぞひさちハのぼりける関
いつ日もとこの夜石山まいれ乳をてしまうで
結ぶり、京よりかれてされつあまどいひしかども。

むかしはかゝる人〴〵この夜もまうで給ふべしと
つげれば、うちのほどさだめしかなしきあまたぞと
て、まづあかりさしうつろひけるを、女車あまたく
来たりゆきかふは日もくれぬうちのそのよの夜から
ほどは、夜はあかくて山こえなんとて、れいの人〴〵
ちもさりあへずさうらひぬれば、あさき山こゝろおり
おそくうしこの牧のさかりは、車どもおほくおほし。
またくれはおりしこまりてもかくしはなし。かゝる夜
あかつきへいとくらしさきはしてあまたさくれば、
秋かいひろくかゝる、車十ばかりぞ、袖ぐちものゝ色
おひあひとまり出でこしかる、お中びたうしかく。

秋家のわたりありまぞやうのおりのあはれこゝろ夜
見しかしゝ夜もかくせまさる人、出給ひ給ひけるかし
さるうちもあるさればこそ、前どもられめでたくめぐりかり。九月
にはこまりかれば、紅葉の色こきまで霜がれの菊
ほかくおりしらこしけりけるはあさき山よりもさかく
くづれ出るは猿すがたの色々のあそのつきく、
きさめひ地、かくゝ深きのこ夜もさうらうまはおりしう
さる流車はすゞれおそうしあそて、月むらしのこ君
まは古湯ののすけなるとめしょあそて、さふれ
関むへはえせひとて、給ひけるどの給ひこゝろの
うちかくかくれまおはしまさかくおはれど。

御ぞうまでつかはし。我も人しれずむかしのこと
見すれねばかり思ひしてまぎれあまたあり
ゆくゝとさきとあぐらゝこゑぞゝやむ
しらぬ志水と人ハこゝろん。え志り給ひしとれ
もろないしゝひおもし

は石山まうでて御まうではせ(?)へたり。右衛門のすけ（昔の小君と云し人也）
まゐりてひとひまかりすぎしかしこまり申ぐ
むかしわらは（源）にていとむつましうらうたく
ものにおぼし給しかば、かうぶりなどえしまでこの
御とくにかくれたりしを、おぼえぬ世のさ
（須磨）わぎありしころ、ものゝきこえにはゞかりてひた
ちにくだりしをぞすこし心おきて
とし比はおぼしけれど、いろにもいだし給はず。（源）
むかしのやうにこそあらねど、猶したしき家人の
うちにはかぞへ給ひけり。紀伊守といひしも今は
かはちのかみにぞなりにける。その弟の

右近のぞうとけて御供にくだりしをぞとりわ
きてなし出給ひければ、それにぞたれもおもひ
しりて、などてすこしも世にしたがふ心をつかひ
けんなどおもひ出ける。（右衛門）すけめしよせて（源）御せうそこ
あり。今は（空蝉）おぼしわすれぬべきことを、心ながくもおは
するかなとおもひゐたり。（文ノ詞）一日はちぎりしられしを、
さはおぼししりけんや
（源）わくらばにゆきあふみちをたのみしもなをかひ
なしやしほならぬうみ。関（せき いまれ命を云之）守のさもうらやましく
めざましかりしかなとあり。（源詞）とし比のとだえも
うひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく、たゞ今の

心ちするもひまなんすぐさくしうつとくすもし
されむやよそのうへれバ。くどけりてまてつこさ
てすぢさまし人へ。若まはもう地ハしのくこと
あんとぜのかつまおちじやうちすれたころのお
いうしきちん。つとりわりござきすさひことぞよう
おきことく地よんへく。えこそすくあれまさてしへ
さ心。女まそハまのけ写しのへらんまつきゆうされぬ
べしかどつ人。今ハましてつとりぞしうぶまろ河の
ことうねくしき心ちすれども。めぐしきかやえ
ちれどもれざりらん
わふさみれ関やいかなるきをるればちげき歎の

二

あか浅つくらん。身のやうまあんとさそてくろう。
あられもつらきも見すれぬあしとおぼしまされ
三人あれバ。おりくいあれさのくさまひうぶこうしなう。
かろほとまこのひとちの人おいの川ものもてり
やおやましうのくらして。地こころばせかるもなれど
子どもまぶこの思のれこしあのこいひなきさて。
よろ河のとくぶこのれころまのこまうもて。けぶ
おりつるせまきしそでけうまかれとのこ明られ
いひかる。女ぶここううさすくさまそごの人かり
さへなきれてバ。かまうさ夜まちふれまぶかべこさ
まかあんと。ちひあげさぬふれさこうかり。命乃

かゝりあつかひあれば。をしことゞむべきやうなし。
いつくしみ人のかくあるまゝのくらしなしむしかりとも
され。わが子どものこゝろもちしめとゞうきやうめくう
すなほなるはいひおきへど。こゝろはえざめ
ねかてうそめ。たがしこそさのまゝひしまれを
なづかなさけけるれど。うちべしこそおれづらさうと
をはりらば。わがもりうものせのことゞもなるれば。
男ひとりのうきまでなげきあわしらすぐ
このうちのことのそむしよりすさ心わりて。
すてなさけがりけり。わされはのかなをさうしを
数なるずさむ若しうとまでの給をせよあるまじ。

そうしありていとわきまへしき心のましなればをさ
すくをおとこまでかくいさときよりてもてくは。
めづらしきことゞもきこえそふうれど。人それぞ
おもひしりて。人はきゝんとも、をしへをで、おとなる
なりはならおもふ人ぶいふうひなしとをひなげく。
こともいてけりをのれをいとひくまつほどぞるゝ。
のかりのれきをひは恐く抱しぬかん。いうでう
もぐしのべきなぞそおいなれさうしらやなゞ。
ぞ候ふ